

同時代感覚を取り戻すために —共同研究参画覚書—

I, I remember
Standing by the wall
The guns shot above our heads
And we kissed as though nothing could fall
And the shame was on the other side
Oh we can beat them for ever and ever
Then we can be Heroes just for one day
David Bowie

黒田 俊郎

この文章は、「教養教育の戦略的再構築—メディア・人間・世界」と題された県立新潟女子短期大学2006/07年度共同研究に参画する筆者の意図を明らかにし、さらに次年度刊行予定の本報告書に掲載する論文の現段階での構想を提示することを目的としている。そこで最初に、共同研究の目的を確認しておくことにしよう。

「教養」の位置づけは、社会・経済・政治の状況、また知的な状況にともなって、大きく変化した。「基礎的素養」という意味でも、「人格の陶冶・形成」という意味でも、旧来の「教養」の失効は疑い得ない。にもかかわらず、現代社会を生きる諸個人に要求される知識の総量は増えるばかりである。単なる古典的な知の伝授に留まらない、「教養」の戦略的再構築が求められる所以である。第一に、我々に求められている再構築は「批判的な」研究である。第二に、我々は「教養」を人間と世界とを媒介する「メディア」であると捉える。第三に、「メディア」としての「教養」を、メッセージを「受容する」営みであるとともに「表現する」営みとして、両方向から考察する。第四に、こうした観点から、(1)何が伝えられるべきものであるか、(2)それをどう伝えるか、そして、(3)どこまで伝えられたのかを明らかにする。共同研究に参加する教員は、各人の専門領域と以上の論点との接点を考察しつつ、共通の目的のためにそれぞれの研究領域からの発言をしていくものとする。

共同研究事業計画書に記されたこの研究目的を念頭に置きながら、以下、筆者の参画意図を明らかにしていこう。まず第一の論点だが、広義には政治学、狭義には国際政治学を専攻する筆者にとって、研究が現状に対して批判的であることは当然の前提であるといつてよい。現代世界が人間の幸福を阻害する矛盾と難問に満ちあふれていることは論を待たないし、政治学とは、なによりもまず、国の内外を問わず現代社会に組み込まれている構造的かつ直接的な暴力のメカニズムを可視化することによって、その仕組みを解きほぐし、われわれが生きる社会関係をより平和で共生的なものにしていく学問的努力として存在しているからである。

第一の論点がいわば自明だったのに対して第二の論点、すなわち教養は人間と世界をつなぐメディアであるという点を政治学の立場から説明するのは、いささか面倒である。政治学は、プラトン、アリストテレスの昔から、閉じた専門的知識であるよりは、万人に開かれた「広場の言葉」たらんとしてきたので、政治学を教養と結びつけて考える点はそれほど難しくない。難しいのは、教養を政治学と置き換え、政治学は人間と世界を結ぶメディアであるとしたとき、そのことが何を意味するかである。筆者はこう考えている。政治学が人間と世界を結ぶメディアであるということの核心には、「同時代を生きる」という感覚が息づいているのだと。以下、説明してみよう。

政治学を学ぶことによって、人は、この世界が神によって与えられたものではなく、人間の手によって創り出されたものであることを理解する。この世界創造者としての人間の主体性を強調することに学問としての政治学、とりわけマキアヴェリ以降の近代政治学の最

大の特徴があるといつてよい。政治学的知見に拠れば、世界は、適応すべきものではなく、変革すべきものとなるのである。そして今日、変革＝政治の主体は、単数ではなく複数である。私ではなく私たち、あなたではなくあなたたち。この主体の複数性（＝社会性）から「同じ時代を生きる」、すなわち同時代感覚が生み出されてくるのである。政治学的観点からいえば、教養の失効とは、この世界の担い手としての同時代感覚の喪失ということになるのではないだろうか。映画史家の四方田犬彦が「革命」を特集した新聞紙面で次のようなコメントをしている。

1968年は、冷戦で世界が二つに割れたときに生まれた子が二十歳になり、世界中で「間違っている」と主張を始めた年です。外国はまだ遠く、観念の中だけです。日本の若者もベトナム反戦などで「世界の最前線にいるんだ」という自覚と期待がありました。今の学生はガイドブックでベトナムなどに簡単に旅行できますが、同時代を生きているという発想はなくなった。ばらばらで、パレスチナで何が起きているか、関心がないように見える¹⁾。

たしかに四方田が言うように、学生だけでなく筆者自身もふくめて多くの日本人にとって、グローバル化の波のなかで外国は、ビジネス、観光など手軽な旅行先となり、世界はすぐそこまで身近にやって来ている反面、豊かな高度情報化社会の下、自分の仕事や趣味に合致した、ある意味、快適な情報のみを取捨選択することに巧みになってしまった代償として、私たちは、世界中の人たちと同じ時代を今生きているんだという感覚を失ってしまっているのかもしれない。とするならば、教養の戦略的再構築とは、この世界に生きることを肯定しつつも、なによりもまず世界の矛盾と不条理を直視し、たとえそれがシジフォス的な努力であったとしても、この世界をよりよい方向に変えていこうとする知の姿勢と同時代感覚の再生でなければならないだろう。

ここまで論を進めてくるならば、「メディア」としての「教養」を、メッセージを「受容する」営みであるとともに「表現する」営みとして、両方向から考察するという第三の論点に対する政治学的解答は、自ずと明らかとなる。すなわち政治学的立場からする教養とは、世界の人々から発せられたメッセージを「受容」し、それに基づいて世界の構造を歴史的かつ批判的に考察したうえで、世界の人々に向かって世界を「表現」する、つまり世界を長期的な視野に立ってより望ましい形で構想し、イメージし直し、その構想なりイメージなりをメッセージとして世界の人々に発信する同時代感覚に依拠した一連の知的作業から成り立つものであるということができよう。

II

以上の考察をふまえて、上記事業計画書に記された第四の論点、(1) 何が伝えられるべきものであるか、(2) それをどう伝えるか、そして、(3) どこまで伝えられたのか、について簡潔に検討してみることしよう。この共同研究で筆者が具体的に何をどのように伝えるべきと考えているかは、第4節で概要を示すつもりであるが、ここではまずその前に問題を一般的に考えてみると、大学での授業を議論の前提としている以上、基本は、教師としての筆者が学生に世界の現状を紹介するという形をとることになろう。むしろ教師としての筆者の立場を特権化することはありえず、教師もまた学生と共に同時代を生きる人間のひとりとして世界の人々が現場から発する声に耳を傾ける存在とならねばならない。強いといえば、教師はそのような作業を促進するコーディネーターの役割を担うことになる。

また(3)の「どこまで伝えられたのか」については、恐らく共同研究の枠内で完結することは不可能だと思われるので、日常的な授業実践のなかで確認していくしかないだろう。世界の人々から発せられたメッセージを「受容」し、それに基づいて世界の構造を歴史的かつ批判的に考察したうえで、世界の人々に向かって世界を「表現」する、つまり世界を長期的な視野に立ってより望ましい形で構想し、イメージし直し、その構想なりイメージなりをメッセージとして世界の人々に発信する、そのような授業を日々実践し、その結果を自覚的に検証し続けることの重要性は述べるまでもないし、それ以外に道はないように

思われる。

次節では、以上の問題関心に基づいて行われた授業実践の一例を紹介したいと思うが、その前にひとつ補足しておきたいことがある。それは、変革＝政治の主体の複数性についてである。読者諸賢のなかにはすでにお気づきの方もいらっしゃると思うが、政治の担い手、すなわち世界創造の主役が、私たち自身をふくむ広く一般大衆にまで拡げて考えられるようになったのは、実はごく最近なのである。古代ギリシアの民主政治が奴隷制を前提としていたこと、アメリカの独立宣言やフランスの人権宣言が、実質的には財産と「教養」を有した成人の白人男性のみを人間＝政治の主体と考えていたことは、今日ではよく知られている。それではいつ、私たち庶民は「人間」となったのだろうか。

立教大学法学部で長い間「市民の政治学」を講じてきた高島通敏は、「政治の原理」をめぐる晩年の講義録で以下のように論じている（高島、2005）。古代ギリシア、古代ローマの共和制においては、市民の徳（アレテー、ヴィルトゥ）と政治家の徳とは、本質的に区別はなかったが、政治的リアリズムこそが政治の〈原理〉であると提唱した近代政治学の創始者マキアヴェリにとっては、市民の徳と政治家の徳は、完全に区別されるべきものであった。そして君主の備えるべき徳は、「道徳とはまったく関係のない、国家を統治する〈能力〉」として定義された。国家の建設と維持こそ、政治の最高の目標であり道徳であると考えたマキアヴェリの政治的リアリズムとは、「現実の政治のなかにある動かしがたい法則や力学を認識し、それに沿って政治を行うこと」であり、「それを無視する提言や処方箋は、観念的な理想主義であり、道徳や宗教の領域の問題ではあっても政治的には無意味だとする考え方」であったのである（高島、2005:98-100）。

高島は、さらに近代国家の発展に伴い支配的となった国家理性（レゾン・デタ）の思考法や心情倫理と責任倫理との区別を強調したマックス・ウェーバーの議論、あるいは「現実的なものはすべて理性的である」（ヘーゲル）という標語の下、階級闘争による資本主義の没落と社会主義の勝利を歴史的必然として描いたマルクスの歴史的リアリズムを紹介したのち、結論としてリアリズムを政治の〈原理〉として承認している。ただし高島のいうリアリズムとは、マキアヴェリ的なリアリズムではなく、市民の政治的リアリズムなのである。「マキアヴェリ的な政治のリアリズムを市民の政治的リアリズムで包み込み、乗り越えてゆくことこそが、今日における市民の政治の究極的な目標でなければなりません」と高島は述べているのである（高島、2005:115）それは、どういうことなのだろうか。高島は次のように説明している。

マキアヴェリが『君主論』を書いたのは、そこに、中世世界におけるように政治の全体を運命として受け止めないで、それを人間の手で変えられるものとして考え直す問題設定の転換があったからなのだが、現代とマキアヴェリの時代では、政治を取り巻く条件が大きく異なっている。マキアヴェリの時代は、まだ国家や権力が存在しておらず、君主はそれを創出するためにあらゆる人間的な力を振り絞って独力で世界を支えるアトラス的な主体が要求されていたが、現代は、政治指導者の主体性は完全にやせ細ったものとなってしまっている。すでにできあがったものとしての国家や権力に寄りかかることによって、政治指導者の主体性は、それを保障する官僚制度や利害集団のなかに分散してしまっているからである。マキアヴェリの時代、君主の個人的能力が政治の主体性を支えたのに対して、現代は、デモクラシーや合意による支配が主体性を支えるべきものとして存在しているにもかかわらず、制度や集団に寄りかかった職業政治家たちは、官僚制化され私物化された間接民主制の弊害の下、保身と問題先送りを常習とした短期的視野に拘泥されて現代社会が直面する困難な諸課題に真摯に取り組むことができず、政治の抜本的改革に着手することもまたできないのである（高島、2005:110-113）。

そのような状況の下、現代政治における新たな政治的主体性の可能性は「市民」たちの手に残されていると高島は論じるのである。では、市民たちにはなにが可能なのだろうか。政権に直接参与しないという利点を生かして、長期的視点に立って政策決定の制約条件となっているさまざまな利害や文化の構造を変革していくという課題を設定することによって、市民たちは、政治全体の改革を目指して計画を練ることができるし、その過程のなか

で「権力のもつ強制性を解体して、それを説得と同意に置き換えてゆく」ことが可能であると高島は主張し、とりわけ後者、すなわち「協調と同意による秩序形成と決定作成こそが政治の基本だという自覚」が市民の政治的リアリズムの核心にあると指摘している（高島、2005:114-115）。

さてところで、ここでいう「市民」とは、いったい誰のことなのだろうか。実は私たちのことなのである。高島は、「現代における政治と人間」をテーマとした別の講義録で、現代的な意味での市民の形成を次のように要約している（高島、2005）。現代の市民は、かつて大衆と呼ばれた社会階層に出自をもっている。その出現の当初、大衆は、スペインの思想家オルテガ・イ・ガゼットのような古典的な市民社会擁護論者には、恐怖の対象以外のなにものでもなかった。オルテガにとって、大衆とは、財産と「教養」を有し理性的な討論の実践者であった近代ブルジョワ市民たちが築いてきた「文明の作法」を、社会の底辺から侵入し破壊する新たなヴァンダル族の如き存在であったのだ。そこでは大衆は、政治のみならず、文化や社会組織のすべてを破壊する群れ＝群衆として表象されていたのである（高島、2005:14-17）。

しかし第二次世界大戦後の高度経済成長によって、1950年代以降、欧米や日本などの先進諸国において「豊かな社会」が実現すると、この恐れられ、蔑まれた大衆のなかから、新たな市民像が形成されることになったのである。豊かな社会の形成による大衆的な市民社会形成の萌芽は、まず大学の大衆化から始まった。知識人と大衆という区分が消滅し、大衆の知的水準が大幅に上昇した。大学はいまや、そういう大衆的な教育機関としての新たな役割を果たすべく変貌を遂げたのであり、その積極面を肯定的に評価しなければならないのである。またこの豊かさの進展のなかで、当初、軽蔑的にいわれていた大衆文化（マンガ、ロック、映画、演劇等）にも新たな可能性が認められてくるようになったのである。もはや、一般の人々を無知で感傷的な大衆というように規定することはできなくなり、政治家や官僚と同等の知的水準にたつ新たな「市民」として把握すべき時がやってきたのである（高島、2005:22-26）。

高島通敏の議論をここまでフォローしてくるならば、そして筆者はこの高島の主張に基本的に賛同しているのであるが、先にみた四方田犬彦のコメントにある1968年の「革命」とは、この新たに大衆化した大学において、新たな市民たるべき学生たちがその世界同時代性を感性と行動によって明示した初めての出来事であったと理解することができるのではないか。そしてもし今日、その同時代性と同時代感覚が、グローバル化と新自由主義的経済政策を基調とした、さらなる豊かさや情報化の波のなかで見失われつつあるとするならば、現在、何よりもまず回復され、復権されるべき教養とは、以上述べた意味における新たな「市民」たちの政治的リアリズムを擁護し、支え、発展させる総合的な知でなければならないであろう。

III

以上の説明で、なぜ筆者が教養教育の再構築をめぐる共同研究に政治学の立場から参加したかについては、おおよそのところは理解してもらえたと思う。しかし論の運びに、まだいくぶん抽象的で生半可な部分があるかもしれない。そこで本節では、県立新潟女子短期大学2006年度後期に若月章教授と共同で筆者が行った「特殊講義A：現代平和論」の授業実践の記録を紹介し、これまでの議論の足らざる点を補うこととしたい。

「特殊講義A：現代平和論」は、国際教養学科2年次後期の選択科目で、副題に「現代平和論」とあるように、政治学というよりは国際研究分野に属する専門科目であり、国際関係論が専門の若月教授と国際政治学を専攻する筆者が担当した。受講生は学生14名、特別受講生制度に基づく市民4名、計18名であった。以下紙幅の都合もあり、筆者が担当した部分を中心に授業内容を簡潔に紹介する。

授業を行う際の筆者の基本的問題関心は、「同時代感覚の回復」という上述の問題設定と完全に重なっていたが、すでに述べたように、授業内容が筆者の狭義の専門である国際政治学分野のものであったので、テーマ設定は、それに合わせる形でより限定的かつ具体

的なものとし、「戦争と平和の不可分性」と「日常性のなかでの平和構築」のふたつに絞って見た。「戦争と平和の不可分性」とは、戦争と平和が分割不可能であることを自覚することの重要性、すなわち「私たちの平和、彼らの戦争」といったフレーズに表象される、戦争を「対岸の火事」視して、平和な私たちの社会を言祝ぎながら（日本に生まれて良かった！）、海の方こうで始まった戦争に苦しむ彼らに憐憫の情を示す、そのような心理の問題性を受講生に理解してもらおうプログラムであり、「日常性のなかでの平和構築」とは、戦争と平和が分割不可能であることの自覚のうえに立って、戦争と平和の共存を許容する安全地帯の平和＝閉じた平和ではなく、原理的に世界中の人々に開かれた平和（peace on earth!）を私たちの日々の生活からどのように構築していくかを考える作業であった。

授業は、まず雑誌『前夜』創刊号に掲載されたノーマ・フィールドのエッセイ「戦時下の大学教室で原爆を考える」を読むことから始まった（フィールド、2004）²⁾。タイトルの戦時下とはむしろイラク戦争のことであり、大学とはフィールドが教鞭をとるシカゴ大学をさし、そして原爆とは、述べるまでもなく米国によって広島と長崎に投下された原子爆弾のことである。つまりフィールドは、ブッシュ大統領による2003年5月の大規模戦闘終結宣言後もテロが頻発し内戦にむかって坂を転げ落ちるようなイラク情勢の最中の2004年春学期に、日本文学のカノンを読む当初の授業プランを変更して、「人命を救った原爆」として流通する米国の原爆観をあえて批判的に検討する授業を行ったのである。イラクを民主化するために始めた戦争を正当化するために第二次大戦後の日本占領経験を引きあいに出していた当時の米政権の思惑に真っ向から挑戦する勇氣ある企画だったといっている³⁾。

フィールドのこの短いエッセイには啓発的な論点が多数内在しており、なかでも「映像と言葉」をめぐる議論は、次節で本報告集掲載予定の論文の構想を語るさい簡単に検討したいと思うが、ここでは学生たちが授業で提示したいくつかの論点を紹介するにとどめたい。学生たちは、主に四つの論点を彼女のエッセイのなかに発見し、議論した。それは、（1）日常のなかの戦争、とりわけ戦争と平和の分割可能性の罨について、（2）対話という方法について⁴⁾、（3）歴史の記憶と客観性について、（4）日本国憲法について、である。以下、（1）と（4）に限定して学生たちが抜き出してきたフィールドの言葉を列挙してみよう。

（1）牧歌的なキャンパスを横切り、熱心に勉強する学生を見ていると、イラク戦争は対岸の火事どころではない。遥かに遠い。それが異様なのだ。私自身、徴兵制度が復活すればその対象になる息子、それに娘もいる。我が子を戦争になど絶対行かせない！すべてを脇に置いて、戦争の終結のために努力するだろう。同時に、大きな決断を迫られる可能性もある。この国と今の生活を捨てようか。日常は完全に中断される。でも、戦争とはまさに日常の中断ではないか。もちろん、私もそんな事態を望んでいない。誰の子も死なせたくないし、たとえ助かったとしても、生涯ぬぐい去れない暴力を体験して欲しくない。しかしいまのように、戦争がよその国の話であるかのような、自国の話であってもまったく知らない人に訪れる災いであるかのような暮らしを容認することが自分の人間性を深く傷つけているような気がしてならない。徴兵制支持者になりかかっていた私は授業を通してますますそうなっていった。何を語っても、この恵まれた空間を共有する私たちに戦争が届いてこないことがはっきりしたからだ。しかし、徴兵制の復活は望ましい解決策でないばかりか、本当に戦争の終結を早め、この先、戦闘攻撃を阻止するものかどうかわからない（フィールド、2004:22-23）。

（4）秋葉市長が国連憲章や日本国憲法に言及したことそれ自体大したことに思えないかもしれない。憲法や国連憲章は言葉からなっている。言葉にすぎない、とも言える。しかし、その存在理由は言葉がある行動を義務づけ、ほかの行動を禁ずることにある。法律をただの言葉と解し、軽率に、恣意的に扱うことは権力者にとってたやすいことである。行動や物に比して言葉は空気ほどの重さもない。そういう存在である言葉に法律という権威を与えることにより、人間は暴力以外の秩序を手にすることができたのである（フィールド、2004:7）。

授業はその後、リレー方式で若月教授が長岡市と新潟市の非核平和都市宣言を素材として戦争体験の風化と継承の問題を論じたのち、筆者がNHKスペシャル『被曝治療83日間の記録：東海村臨界事故』を題材に⁵⁾、1999年9月30日、茨城県東海村の核燃料加工施設JCO東海事業所で発生した臨界事故による放射線被曝の凄絶さと、その凄絶さにもかかわらず人々の記憶が事故後急速に風化していった事実を確認し（今、事故で亡くなったふたりの技術者の名前をすぐに思い出せる人が、いや事故そのものを直ちに想起できる人がいったい何人いるだろうか！）、その意味を論じてみた。学生のひとりには、こんな感想を寄せている。

今まで小・中学校の国語の授業で戦争の物語を読んだり、テレビで話を聞いていて、漠然と原爆は恐ろしいものだとは思っていましたが、今回『被曝治療83日間の記録：東海村臨界事故』のビデオを見て、放射線被曝は自分の想像をはるかに超えていて、やっと本当の恐ろしさを知ったような気がしました。被曝した直後では、会話も出来て、手が少し腫れた程度だったというのが最初、意外に思いました。原爆の話で聞いたようにすぐに全身大火傷になると思っていましたからです。しかし、原爆の場合は爆発もあるからだという話を聞いて納得しました。放射線を浴びた時点で染色体が傷つけられ、新しい細胞が作れなくなり、今の最新の医療をもってしても、体の内側から滅びるのを食い止められないのは愕然としました。失礼な言い方になるかもしれませんが、人を看護するというより、体を“物”のように保つことしかできないのには衝撃を受けました。人が人らしくいられなくなるのが放射線被曝の恐ろしさだと思いました。原爆が落とされた時点ですぐに死ぬのではなく、大内さんのように長く苦しみながら死んでいった方たちはこんなに壮絶な最期だったのかと思ひ知らされた気がします。今までで一番リアルに恐怖を感じたように思います。

続いて筆者の卒業研究の学生で、2006年3月に本学を卒業後、全国大学生協同組合連合会東京地域センター学生事務局で活動していた山崎オリエさんをゲストスピーカーとして招き、「生協、平和、沖縄一日々の暮らしのなかで平和を考える」をテーマにワークショップを開催し、学内に公開した。ワークショップでは、山崎さんが全国大学生協連主催のPeace Now! Okinawa 2006 (2006.9.4~9: 沖縄県)の紹介を行ったのち、主に在日米軍基地の問題と間近に迫った沖縄知事選にからめて選挙と若者の政治参加をめぐる問題を討議した。学生たちにとっては、1年先輩の身近な同世代からの報告はとても新鮮で刺激的な経験だったようだ。

ワークショップで提起された問題は、引き続き若月教授をコーディネーターに若者の政治参加の可能性と在日米軍基地の必要性の有無の二点を中心にグループ討論のなかで検討された。とりわけ後者については、2006年5月、日米両政府の外務・防衛担当閣僚による安全保障協議委員会(2プラス2)がまとめた在日米軍再編の最終報告に関する全国紙主要各紙(朝日・読売・毎日・日経・産経)と琉球新報の社説が比較され、議論が深められた。そして冬休み前の締めくくりとして、新潟大学名誉教授の渋谷武先生をお招きして、先生の著書『〈きょうせい〉変化考覚書』(私家版)のエッセンスを「若者たちへのメッセージ『協生』による平和の実現について」と題して公開講演会で熱く情熱をこめて語っていただいたのである。

いささかハードな冬休みの課題をへて⁶⁾、休み明け1月の授業は主に筆者が担当した。まず始めに孤高の報道写真家ジェームズ・ナクトウエイの思想と行動を描いたクリスチャン・フレイのドキュメンタリー『戦場のフォトグラファー：ジェームズ・ナクトウエイの世界』(2001)を上映したのち、現代の戦争報道の意義と限界について討議した。そして本学図書館に所蔵されている、現在の日本のオルタナティブ・メディアを代表するフォトジャーナリズム雑誌『Days Japan』のバックナンバーを教室一面に掲げ、受講生に「私の一枚」を選定してもらい、理由を語ってもらった。一例だけ紹介しておこう。

・2006年6月号：ヤニス・コントス(写真・文)「腕を切断されたシエラレオネの男性」-雑誌を

めくって、最初に写真が目に入った。腕を切断された男性の写真だった。腕がないから衝撃的だったのも確かだが、それだけではない。彼の目から、表情から、彼自身の思いが伝わってくるようだった。服のボタンを子どもに留めてもらっているところだが、彼の表情は暗い。彼の目は、どこか遠くを見ているような、さみしそうな、また強い意志をもっているような目だった。写真を見たあとに記事を読み、その理由が少しだけわかったような気がした。1991年から2002年にかけて発生したシエラレオネ共和国の内戦は、ダイヤモンド権益をめぐる抗争で、多くの市民がRUF（統一革命戦線）によって手足を切り落とされたという（万単位だそうだ）。彼は、自分の手を切り落とした兵士の顔をよく覚えており、ふたたび顔をあわせる日が来るのを待っているのだという。そして、その兵士と理解し合える日が来るとは考えていないし、その兵士を許すことも絶対にはないと思っているようだ。私が彼の表情から感じとった何かは、そんな思いかもしれない。また同国では現在、こうした負傷者に対しての食糧配給や医療援助が打ち切られてしまい、彼らはキリスト教団体からのわずかな援助で暮らしている。だがその一方で「3億ドルから4億5000ドルのシエラレオネのダイヤモンドが、世界の宝石店のショウケースを飾り続けている」のだ。この内戦は、ダイヤモンドによって引き起こされたともいわれている。この現実に対して「何かが間違っている」と感じるのは、私だけではないはずだ。世界のある場所では、人間の欲のためだけにお金が使われ、食糧が無駄になっているにもかかわらず、毎日の生活すらままならない人がある。現在、シエラレオネの内戦は一応の終結を迎えているが、彼に、そしてシエラレオネの人たちに本当の平和が訪れているのだろうか。誰がみても、どう考えても、彼らの状態は平和ではない。世界ではシエラレオネと同じような、あるいはもっとひどい不平等が蔓延しているはずだ。しかしその現状を知らない人たちがいる。現に私はシエラレオネという国名すら知らなかった。記憶する限りでは聞いたことがない。当然のことながら内戦も知らなかった。恐らく世界には、まだまだ知られていない「平和ならざる状態」が数多く存在するに違いない。それらを伝える手段のひとつがメディアなのだと思う。ナクトウェイも、まず「現状」を知ってほしいのではないだろうか。見た人たちに何かが伝われば、人々は疑問を持ったり平和に関心を持つようになる。大規模な戦争がなくなり、（豊かな国に住む人はとくに）世界が平和だと錯覚してしまいそうな今、メディアの果たす役割は大きいものなのかもしれない。

以上見てきたように、2006年度後期の「特殊講義A：現代平和論」は、ある程度その授業目標を達成できたのではないかと筆者は考えている。むろん中途半端に終わってしまい、次年度に繰り越しになった部分もあった。例えば2007年1月にケニアのナイロビで開催された世界社会フォーラム2007や、そこで議論されたグローバルタックスを始めとした、より人間的で平和な「もうひとつの世界」を創りあげていくための短・中・長期の各種政策課題、あるいはそれを可能とする国境を越えた世界のNGOのグローバルな連携・ネットワークなどについては、紹介も検討も十分にはできなかった。しかし学生たちに配布した下記の文章が授業を終えた現段階での筆者の一応の総括であり、受講生への問いかけでもある。

まず最初に皆さんの熱心な授業参加に対して担当教員としてお礼申し上げます。これまでの授業内容を要約する必要はないと思いますが、いくつかの事柄が論点としてはっきりしてきたような気がします。第一に、私たちの日々の生活が一見平穏なものでありながら、現代の世界や日本を取り巻く状況は必ずしも平和でも安全でもないことについては、概ね意見の一致があるようです。むろん危機感の度合いは各人各様でしょう。私個人は、雑誌『前夜』を紹介したぐらいですから、日本の前途にかなりの危機意識を抱いています（関山演習場[妙高市、上越市]で2006年10月中旬、自衛隊と米軍600名による「市街地戦闘」を想定した軍事演習が実施されたのを知っていますか！）。しかし皆さんのなかに、戦争のリアリティというか平和を破壊するものの恐ろしさを実感できなくて苛立っている（あるいは安心している？）人があることは十分に理解できます。人を行動に駆り立てる実存的切迫感は、そう容易く体得できはしないものです。もしそのことに苛立っている人がいたら、まだあせる必要はありません。自分のなかで時が満ちるのを待てばいいんです。第二に、しかしその危機感の程度に差があるとはいえ、平和で公正な社会関係の樹立は、人として幸福に生きる前提であり、

個々人の自己実現を支えるもっとも重要な基盤となるべきものです。(戦争と社会的不公正は、その基盤を破壊し、世界の相貌を醜く歪めます。)したがって公正で平和な世界の実現のために、私たちがこの新潟でなにをなすべきかを考えることは価値あることです。例えば、「殺されたくない」という思いが現代の平和の礎になるのでしょうか、それとも「人を殺したくない」という願いこそが重要なのでしょうか。またこれからの平和を考える際、わが国が過去に経験した戦争は加害と被害、そのどちらにウェイトをおいて分析され、論述されるべきなのでしょう。誰が加害者で誰が被害者なのでしょう。誰を責め、誰に謝るべきなのでしょう。そして最後に、平和を権利として捉え、その権利としての平和(日本国憲法では平和的生存権といいます)を脅かすもの(平和の敵?)に対しては断固抗議し闘うときが迫っていると考えるべきなのでしょう。それとも平和を願う心をもって誠実に訴えることによって(敵を作ることなく)万人を動かし、穏やかな日常生活の延長に平和を希求すべきときなのでしょう。皆さんはどう考えますか?

IV

前節の授業例の紹介でもおわかりだと思うが、「同時代感覚の回復」という主題による授業実践の試みは、これまでもある程度の成果をあげてきている⁷⁾。しかしもっともっと授業の質を上げていくことはできるはずだし、その際、異なる分野からなされる授業実践の試みはとても参考となる。また他分野の専門家との共同作業は学問的刺激に満ち溢れている。筆者がこの共同研究に参画した所以である。さて以下においては、以上みてきた問題関心に基づいて、来年度刊行の本報告書に筆者が執筆を予定している論文の概要を簡潔に提示する。読者諸賢のご教示を賜れば幸いである。

本報告書掲載予定の論文では、第1節でみた〈世界の人々から発せられたメッセージを「受容」し、それに基づいて世界の構造を歴史的かつ批判的に考察したうえで、世界の人々に向かって世界を「表現」する、つまり世界を長期的な視野に立ってより望ましい形で構想し、イメージし直し、その構想なりイメージなりをメッセージとして世界の人々に発信する同時代感覚に依拠した一連の知的作業〉という政治学の立場から再構成した教養教育のプログラムのうち、とりわけ前半部分、すなわち〈世界の人々から発せられたメッセージを「受容」し、それに基づいて世界の構造を歴史的かつ批判的に考察する作業〉に取り組みたいと考えている。現時点での表題は「映像のなかの世界、世界のなかの映像—ひとつの授業構想—」で、全体の論文構成は次の通りである。

1. イメージの政治学—ふたつの崩壊の狭間で
2. イメージの構築と脱構築—ユーゴ内戦を素材として
3. イメージのリアリティとアクチュアリティ—共同体論を媒介として

以下、三つの節について順次説明していくことにしよう。第1節「イメージの政治学」では、ベルリンの壁の崩壊(1989.11.9)で始まり、世界貿易センタービルの崩壊(2001.9.11)で終わったひとつの時代としての1990年代を再考する。通常、「冷戦後の世界」として語られるこの時代は、精密誘導兵器によるハイテク戦争の時代であると同時に、民族浄化、ジェノサイド、テロリズムに彩られた「新しい戦争」の時代でもあった。それはまた、CNN、インターネット、アルジャジーラに代表されるグローバルメディアによるイメージと情報操作の時代であったともいえよう(門奈、2004; 青山、2004)。壁が壊されて始まり(ベルリン)、摩天楼が破壊されて終わった(ニューヨーク)時代。隣人達が殺し合い(ユーゴ、ルワンダ)、壁が再び築かれた時代(パレスチナ、南アフリカ)。そしてそのすべてをカメラは目撃していた・・・この時代を筆者は、既発表の拙稿(黒田、2001、2003、2005、2006)も活用しながら、なによりもまずナクトウエイの写真集『インフェルノ』を見つめ直すことで考えたいと思う(Nachtwey,1999)。セバスチャン・サルガドの写真集(Salgado,2004)と比較し、スーザン・ソントグの批評(ソントグ、1979、2002、2003)を手かがりとしながら、90年代の黙示録ともいべきこのナクトウエイの写真集の意義を筆者なりに読解し、確定したい。またその際、徐京植の仕事(徐、2005)や土佐弘之の

考察(土佐、2006)にも言及し、さらには報道写真とは何かを考えることの延長線上に、文学とは何かをめぐる岡真理の発言(岡、2006)や教育と教養の目的を語るノーマ・フィールドの言葉(フィールド、2000;加藤・フィールド・徐、2005)にも目配りをしたいと思う。

第2節「イメージの構築と脱構築」では、ユーゴ内戦を素材として第1節で展開した議論をさらに発展させるつもりである。すなわちユーゴ内戦をめぐるイメージの構築と脱構築の作業を繰り返しながら、権力やメディアによる情報操作に踊らされることなく(高木、2002)、現場の民衆の声に耳を澄ます授業をどのように実現するかを考えることにしたい。共同研究に参加した当初は、ベルリンの壁崩壊と9・11同時多発テロも同様に検討候補だったが、両者ともその原因を歴史のなかに辿っていくとかなり長期の時間軸を設定せざるをえず、さらに資料的にも若干の不安があったので、現代国際政治論や現代ヨーロッパ研究といった関連授業での試行錯誤をもう少し続けてから取り組むほうが賢明だと判断した。これに対してユーゴ内戦は、大規模戦闘の勃発(91.6)と終息(99.6)で判断すれば、まさに90年代の戦争であり、また人道的介入をめぐる議論ひとつとってみても、90年代を象徴する戦争であった。

さらにユーゴ内戦に関しては、筆者の側に豊富な授業経験があることも重要であった。英ブライアン・ラッピング・アソシエーツ社製作のドキュメンタリー『ユーゴスラビアの崩壊』(1996)や、ミルチョ・マンチェフスキー『ピフォア・ザ・レイン』(1994)、ダニス・ダノヴィッチ『ノー・マンズ・ランド』(2001)といった映画を素材として、とりわけボスニア内戦(1992-95)については何度も授業を行った。またボスニア内戦とコソボ戦争(1999)を素材に、ソマリア(1993)やルワンダ(1994)にも言及しながら、イグナチエフの一連の著作(1996、1999、2003a、2003b)や最上(2001)をテキストとし、人道的介入の是非についてもずいぶん討議したものである。どの授業もそれなりには成果を収めたが、紋切り型で定型的なイメージに安住することなく、歴史の複雑な壁のなかに分け入り、悲劇を悲劇として人間の尊厳の相の下で考察すること、そして内戦のリアリティを実感し、ユーゴ内戦を同時代の出来事としてアクチュアルに把握できたかということ、そこには越えることのできない壁(所詮彼らの戦争ではないか!)があったこともまた事実である。

今回は、この壁を超える努力をしてみようと思う。そのために大切なのは方法論である。前節でみたノーマ・フィールドのエッセイは、この点で重要な示唆を与えてくれる。結論を先に述べてしまえば、映像に意味とアクチュアリティを与えるのは言葉であり、言葉が紡ぎ出す物語であるということである。フィールドは、次のように指摘している。

授業のはじめ、やはり共通のベースとして、私たちは一人の少年の写真に見入っていた。それは『焼き場にて、長崎』と題されていて、10歳ぐらいの少年が死んだ弟—可愛い赤ん坊である—をおぶって『直立不動』の姿勢で写っている写真である。学生たちは言葉の重要性をはっきり意識するきっかけとなった。一人がこの写真だけをインターネットで友人に送ると、別に何も感じないと言ってくる。その直後、写真家の言葉を送信すると反応が一変したようだ。・・・(中略)・・・映像で育ったと言われるこの世代にとって、言葉は逆に新鮮なのかもしれない。いや、映像が一人歩きしているかのように時代を語るものがそもそも間違っていたのであろう(フィールド、2004:12-13)。

ここで筆者は、唐突かもしれないが、ドイツの映画監督ヴィム・ヴェンダースが敬愛する小津安二郎監督の『東京物語』(1953)について語った言葉を思い出す。ヴェンダースは、映画のなかでの尾道水道の映像についてこう語っている。ドラマが進むにしたがって、老夫婦の東京への旅に感情移入した観客にとっては、反復される尾道水道の映像は心象風景としての存在感を増していき、映画の幕切れに至っては、その映し出された尾道の海峡風景は観客の心になんともいえない現実感をもって迫ってくるのである。確かに小津の技法を受け継ぐヴェンダースや侯孝賢の映画にも心に残る風景描写があるし、小津との影響関係はわからないが、是枝裕和監督の『誰も知らない』(2004)でも、映画の進行につれて、東京の街の風景が目にも鮮やかに映えるようになってくる。恐らく複雑さを複雑さのまま

提示する、明晰で繊細で深みのある物語が映像に魂とリアリティを与えてくれるのだろう。筆者もそのような授業ができたらと思う。

そこで第2節では、自家菜籠中のドキュメンタリー『ユーゴスラビアの崩壊』（既出）から出発し、そこで提示される事実関係を明晰さを維持したまま複雑化していく手法を採用して、主にボスニア内戦の過程を検討することにしたい。その際利用する資料としては、同ドキュメンタリーの詳細な取材記録 (Silber & Little, 1996)、スレブレニツァ虐殺を傍観したと非難された国連とオランダ側の報告書 (UNSG,1999;NIOD,2002)、紛争終結目的で軍事介入した米国側の記録 (Holbrooke,1998)をはじめとして、さらには ICTY (International Criminal Tribunal for the Former Yugoslavia) のウェブサイトや関連NGOの記録、あるいは最新の邦語文献 (月村、2006;多谷、2005、2006) などにも目を通しておきたい。

ナクトウェイの写真集をみていると、現在の世界では、こんなにも命というか生それ自体が、それを保護してくれていたはずの共同体から暴力的にはじきだされ、剥き出しにされてしまっている状況があると愕然とせざるをえない。したがって、以上の授業構想がうまく実現し、世界との回路＝同時代性が少しでも回復したならば、その後の急務は、なによりもまずこの「剥きだしにされてしまっている生」を緊急避難的にでも救うための、グローバルでローカルな共同体再建プロジェクトであろう (むろん共同性は、公共性、権力性と相互に密接に絡み合っているの、その関連性に注意を払い、差別の重層構造にも気をつけなければならないが)。

そこで最後に第3節「イメージのリアリティとアクチュアリティ」では、ジェラード・デランティによるコミュニティ論の理論整理を参照しつつ (デランティ、2006)、「何も共有していない者たちの共同体」という希望、旅という経験を通して紡がれる「信頼」という絆に関するアルフォンソ・リングスの哲学の可能性を検討したい (リングス、2004、2005、2006a、2006b)。そしてできれば (正直言って筆者の手に余りそうな気もするが)、ポール・ギルロイのレジスタンスとアートとコミュニティをめぐる議論にも触れられればと思う (ギルロイ、2006)。

註

- 1) 夢見たものは今一団塊世代のアイコンー (43) : 「革命」『新潟日報』夕刊、2006年11月18日。
- 2) 『前夜』の詳細については、NPO前夜のウェブページ (<http://www.zenya.org/index.php>) を参照のこと。なおノーマ・フィールドのエッセイを読むに先立ち、受講生には『前夜』創刊号に再掲された茨城のり子の詩「内部からくさる桃」を配布した。以下に、詩の全編を掲げておく。茨城のり子「内部からくさる桃」：単調なくらしに耐えること／雨だれのように単調な・・・／恋人どおしのキスを／こころして成熟させること／一生を賭けても食べ飽きない／おいしい南の果物のように／禿鷹の闘争心を見えないものに挑むこと／つねにつねにしりもちをつきながら／ひとびとは／怒りの火薬をしめらせてはならない／まことに自己の名において立つ日のために／ひとびとは盗まなければならない／恒星と恒星の間に光る友情の秘伝を／ひとびとは探索しなければならない／山師のように 執拗に／埋没されてあるもの)を／ひとりだけにふさわしく用意された／(生の意味)を／それらはたぶん／おそろしいものを含んでいるだろう／酩酊の銃を取るよりはるかに！／耐えきれず人は攫む／賈金をつかむように／むなしく流通するものを攫む／内部からいつもくさってくる桃、平和／日々に失格し／日々に脱落する悪たれによって／世界は／壊滅の夢にさらされてやまない (茨城、1955)。
- 3) そもそも源氏物語など日本文学の専門家であるフィールドがこのような授業を行ったきっかけは、国連憲章を無視し大義なき戦争を始めたブッシュ大統領と、そのブッシュ大統領を全面的に支持し、日本国憲法がないかのように行動した小泉首相の言動を厳しく批判した2003年8月6日の秋葉忠利広島市長による平和宣言だった。「国連憲章と日本国憲法の存在無視 (否定より悪質である) の指摘を聞いて、久しぶりに、ほんとうに久しぶりに公共の場で真実が語られる興奮を覚えた」とフィールドは綴っている (フィールド、2004:6)。そして授業準備の様子を次のように記している。「この授業の準備にとりかかったとき、広島と長崎の原爆と劣化ウランについての知識 (授業の正式なタイトルは Hiroshima, Nagasaki, and Beyond である) をつぎ込もうという魂胆があった。学生たちは学校教育では原爆についてほとんど

教えられていないか、さもなければ一人歩きを続ける『人命を救った原爆』しか知らないはずだ。教材収集と選択にかなり力を入れた。実際、注意していない間にかかなりの文学作品や被爆体験記が英訳されていたし、さらに英語の資料集や論文集が出ていた。映画やインターネットの資料も膨大にある。たった10週間でとりあげられるものを決めるのは難しかった。共通のベースをつくるためジョン・ハーシーの『ヒロシマ』（石川欣一、谷本清、明田川融訳、法政大学出版局、増補版2003年）と当時の書評、それから原爆投下直後の世界の知識人の反応を併せて読んだ。次に文学作品や記録、さらに日系人、朝鮮人被爆者の闘いや原発労働者の状況、スミソニアンズの幻の原爆展などを経て、最後に原爆投下の再考を論じたものをいくつか読んだ。数字の意味、作家の文章と市民の文章、子どもの記録と大人の記録、絵と言葉、政治家の責任と科学者の責任、戦闘員と非戦闘員の区別の妥当性等々、議論の種には困らなかった。時期が時期なので、原爆についての知識を教え込むことで若い学生に反戦意識を煽りたかった。」（フィールド、2004:11-12）

4) 「一般にアメリカの大学はレポートと試験、そして『参加』(participation)といういささか曖昧な概念のもとに学生の評価をおこなう。『参加』とは要するに『自分の考えをもつ』ために、またその証として、学生がしゃべることである。この教育イデオロギーには抵抗が無くもないが、アメリカ社会で生きていくには必要な訓練、ととりあえず考えている。今回の授業の中心はインタビュー・対話プロジェクトだった。学期中最低三回の対話をもつことが条件で、それに付き合ってくれる人なら相手は誰でもいい。第二次大戦や原爆についての知識の有無は問わない。体裁は面接、電話、メールやインターネットのどれでもいいが、それぞれの長短をあらかじめ考えておくことを奨めた。たとえば、書くことで自由な自己表現ができる人もいるが、受話器を通して伝わってくる声色というデータを犠牲にしなければならない。」（フィールド、2004:13）フィールドはこの対話という方法の可能性を大切に思っていたようで、彼女のエッセイもまた対話をめぐる印象的な一節で結ばれている（cf.フィールド、2004:23）。なお戦争体験の風化と継承をめぐる日本での近年の対話の記録としては、例えば下嶋(2006)がある。

5) 同NHKスペシャルは2001年5月13日に放映され、その後NHK「東海村臨界事故」取材班(2002)として出版された。同書は、2006年には『朽ちていった命：被曝治療83日間の記録』と改題され、新潮文庫の一冊に収められている（NHK「東海村臨界事故」取材班、2006）。

6) 冬休みの課題の内容は、次の通り。1. これまでの授業内容を踏まえて「あなたからの手紙」を以下の点に留意して書いてください（若月）。①差出人はあなた自身です。②宛名人は現在日本や世界で公職にある誰かにしてください。③形式、テーマ、分量等、内容は自由ですが、ワープロで作成してA4で1～2枚程度が標準となるでしょう。④使用言語は日本語としましょう。⑤日本語で書きますので、日本の公職者へなら自らの責任でそのまま実際に出してもかまいませんが、その場合は、返事があつたらその旨お知らせください。2. 最上(2006)を冬休み中に読んで、次の設問にしたがって私までメールをください（黒田）。①まず同書第4話「平和を再定義する」の内容を踏まえたうえで、あなた自身のことばで「平和」を定義してください。②つぎにそのあなた自身が定義した「平和」の観点からみてもっとも重視し考えなければならないテーマを同書第1話から第9話までのなかから1話選んでください（むろん第4話は除きます）。③そしてその選んだ〈話〉の中身についてコメントしてください。

7) より政治学に傾斜した授業実践の記録としては、黒田(2007)がある。

参考文献

- 青山南、2004、『ネットと戦争－9・11からのアメリカ文化』岩波新書。
茨城のり子、1955、「内部からくさる桃」同『対話』不知火社。初出は、『詩学』1954年10月号。
NHK「東海村臨界事故」取材班、2002、『東海村臨界事故－被曝治療83日間の記録』岩波書店。
-----、2006、『朽ちていった命－被曝治療83日間の記録』新潮文庫。
岡真理、2006、『棗椰子の木陰で－第三世界フェミニズムと文学の力』青土社。
加藤周一、ノーマ・フィールド、徐京植、2005、『教養の再生のために－危機の時代の想像力』影書房。
黒田俊郎、2001、「政治的思考の自律性と平和研究－ヨーロッパの経験から」『文明21』（愛知大学国際コミュニケーション学会）第7号。
-----、2003、「『言葉と武力』再考」『法学新報』（中央大学法学会）Vol.110, Nos.3,4。
-----、2005、「ヨーロッパとアメリカリベラリズムの夢と現実」古城利明編著『世界システムとヨ

- ーロッパ』中央大学出版部。
- 、2006、「2001年9月11日ー私たちはなにをなすべきだったのか」『法学新報』（中央大学法学会）Vol.112, Nos.7,8.
- 、2007、「映画のなかの政治学(1)ー教養教育としての政治学授業実践の記録」県立新潟女子短期大学『研究紀要』第44集。
- 下嶋哲朗、2006、『平和は「退屈」ですかー元ひめゆり学徒と若者たちの500日』岩波書店。
- 徐京植、2005、『ディアスポラ紀行ー追放された者のまなざし』岩波新書。
- 高木徹、2002、『ドキュメント戦争広告代理店ー情報操作とボスニア紛争』講談社。
- 高嶋道敏、2005、『現代における政治と人間ー政治学講義』岩波書店。
- 多谷千香子、2005、『「民族浄化」を裁くー旧ユーゴ戦犯法廷の現場から』岩波新書。
- 、2006、『戦争犯罪と法』岩波書店。
- 月村太郎、2006、『ユーゴ内戦ー政治リーダーと民族主義』東京大学出版会。
- 土佐弘之、2006、『アナーキカル・ガヴァナンスー批判的国際関係論の新展開』御茶の水書房。
- 最上敏樹、2001、『人道的介入ー正義の武力行使はあるか』岩波新書。
- 、2006、『いま平和とはー人権と人道をめぐる9話』岩波新書。
- 門奈直樹、2004、『現代の戦争報道』岩波新書。
- イグナティエフ、マイケル、1996、『民族はなぜ殺し合うのかー新ナショナリズム6つの旅』（幸田敦子訳）河出書房新社。
- 、1999、『仁義なき戦場ー民族紛争と現代人の倫理』（真野明裕訳）毎日新聞社。
- 、2003a、『ヴァーチャル・ウォー戦争とヒューマニズムの間』（金田耕一、添谷育志、高橋和、中山俊宏訳）風行社。
- 、2003b、『軽い帝国ーボスニア、コソボ、アフガニスタンにおける国家建設』（中山俊宏訳）風行社。
- ギルロイ、ポール、2006、『ブラック・アトランティックー近代性と二重意識』（上野俊哉、毛利嘉孝、鈴木慎一郎訳）月曜社。
- ソntag、スーザン、1979、『写真論』（近藤耕人訳）晶文社。
- 、2002、「戦争と写真」同（木幡和枝訳）『この時代に想う テロへの眼差し』NTT出版。
- 、2003、『他者の苦痛へのまなざし』（北篠文緒訳）みすず書房。
- デランティ、ジェラード、2006、『コミュニティーグローバル化と社会理論の変容』（山之内靖、伊藤茂訳）NTT出版。
- フィールド、ノーマ、2000、「教育の目的」同『祖母のくに』（大島かおり訳）みすず書房。
- 、2004、「戦時下の大学教室で原爆を考える」『前夜』第1期創刊号、影書房。
- リングス、アルフォンソ、2004、『汝の敵を愛せ』（中村祐子訳）洛北出版。
- 、2005、『異邦の身体』（松本潤一郎、笹田恭史、杉本隆久訳）河出書房新社。
- 、2006a、『何も共有していない者たちの共同体』（野谷啓二訳）洛北出版。
- 、2006b、『信頼』（岩本正恵訳）青土社。
- Holbrooke, Richard, 1998, *To End A War*, Random House.
- Nachtwey, James, 1999, *Inferno*, Phaidon Press Limited.
- Netherlands Institute for War Documentation (Nederlands Instituut voor Oorlogsdocumentatie, NIOD), 2002, *Srebrenica, a 'safe' area: Reconstruction, background, consequences and analyses of a safe area*,
- Salgado, Sebastião, 2004, *Sahel: The end of the road*, University of California Press. Originally published in Spanish as *Sahel: El fin del camino* (Madrid, 1988: rev. ed. 1996).
- Silber, Laura & Allan Little, 1996, *The Death of Yugoslavia (Revised Edition)*, Penguin.
- UNSG, 1999, *Report of the Secretary-General pursuant to General Assembly resolution 53/35: The fall of Srebrenica*, UN Doc.A54/549.